

宝の海から

白浜で出会った生きものたち

44

京都大学助教 久保田 信 (京都大学 瀬戸臨海実験所)

白浜町児童館の自然観察教室

8月18日、小学生3年生から6年生まで22人が参加して、白浜町審判所前で町児童館自然観察教室があった。昨年はハンドウイルカの全身骨格を子どもたちが発見しており、今年も何か新しい発見があるのではと期待を込めてフィールドへ出かけた。

皮の下は繊維質とコルク質が発達しているの海に水に浮かぶような構造などである。本州の太平洋沿岸では、黒潮が遠くまで流れていく千鳥原まで流れていく。だが、現実には冬の間は枯れてしまっている。

海や海岸の生物は、このように、子孫をできるだけあちこちに広げようと努力をしているのだ。

ゴバンノアシの漂着

直径1・2センチ、高さ15センチ、直徑1・2センチに達する。和名の通り、ゴバンノアシは、年に何回も漂着する。北浜へ漂着した。この浜辺に立ち寄った。再び黒潮に乗って沖合を流れたりしながら、はるばる白浜までやってきていた。

円月島の前の浜で、珍しいゴバンノアシの果実が1個見つかった。ゴバンノアシは、年に何回も漂着しない南国からの贈り物である。今年の観察の幅が12センチ、高さ45センチだった。また、モトマナの果実も1個見つかった。色も茶褐色から灰黒色まで。これらについて、田名瀬英明さんと樫山嘉郎さんといっしょに南紀生物誌41巻(99年)に報告している。

モトマナは沖縄ではよく育っているが、ゴバンノアシは日本には自生しないサカサバ科の樹木で、東南アジアや環太平洋の島々の海岸に生えて林になっているとい

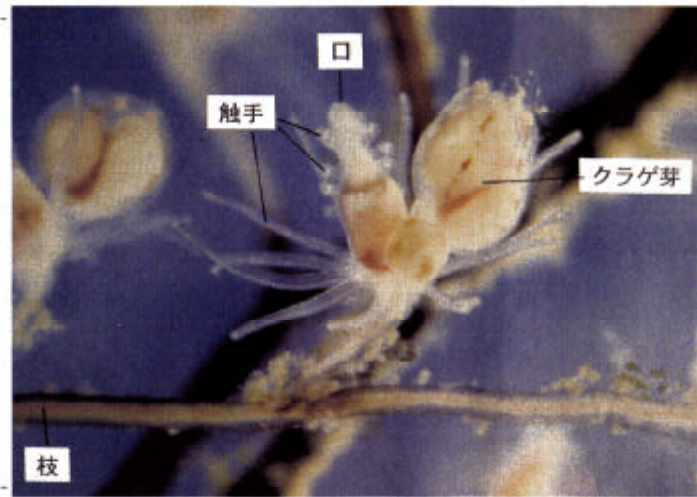
△番所崎の岩礁のタイドプールで筆者の説明を受けながら観察中の児童館の子どもたち(児童館の柴田浩司さん撮影)▽



円月島の前の浜に漂着したゴバンノアシ。稜(りょう)の数は4＝田名瀬英明さん撮影



△瀬戸臨海実験所水族館で、田名瀬英明さんの説明を受けながら生き物観察をする児童たち(柴田浩司さん撮影)



瀬戸臨海実験所水族館の特集展示コーナーで紹介しているハネウミヒドラのポリプとクラゲ

ような海藻に似た付着時代がある仲間だ。実験所水族館の特集展示コーナーにも、このハネウミヒドラのポリプとクラゲのクロズアップ写真を展示しているのでよく見てもらった。

講義室では、今回のもろろ1人の講師である田名瀬英明さんが、漂着した動物植物を次々と分りやすく説明された。ホンダカラガイやオニヒトデ、ココヤシ、クロハコクラゲ、サケカシラなどである。

15号の余波のため、連載第8回で紹介したキンカクラゲがいくつも浮かんでいた。和名の由来となった網袋状の浮きのまわりには、フルーの触手状の個体を伸ばし、ぽっかり浮かんでいたり、裏返しになったり、岩礁上に打ち上げられたりしたものもあった。

児童たちには、タイドプールの岩の壁に羽を広げたように何本も伸びているハネウミヒドラもよく見てもらった。キンカクラゲが一生を沖合で暮らすのと異なって、この

昨年引き続き、ベニクラゲの神秘的な若返りが出たが、「先生が死んだら、後は誰がベニクラゲを飼うの？」という質問があったので「不老不死になって永遠に飼いつづけるから。みんなもいっしょに研究やってみて」と答えた。満洲雅芳館長も、すかさず、「自分もみなと同じように若返って勉強するよ」と続けて言われた。

ベニクラゲの魅力的一生は、当日参加された白浜町教育委員会の石田武夫教育長やアメリカ人のサム・フランク外国語指導助手をはじめ、児童館の柴田浩司さんや他の職員など誰にも興味を持ってもらえた。